

# アイヌ文化を題材とした新聞活用の授業実践と効果 ： 看護師養成課程「基礎科目」を事例として

著者	菊地 達夫
雑誌名	北翔大学北方圏学術情報センター年報 = Bulletin of Northern Regions Academic Information Center, Hokusho University
巻	12
ページ	59-66
発行年	2020
URL	<a href="http://doi.org/10.24794/00003293">http://doi.org/10.24794/00003293</a>

## 研究報告

## アイヌ文化を題材とした新聞活用の授業実践と効果

## －看護師養成課程「基礎科目」を事例として－

菊地 達夫

北翔大学短期大学部こども学科

## 抄 録

本稿は、看護師養成課程（高等教育機関）の「基礎科目」文化人類学の授業内容において、アイヌ民族・文化を取り上げ、新聞記事を活用しながら、その学習効果と有用性を明らかにしようとするものである。アイヌ民族・文化の初学者の場合、新聞活用により、内容の基礎的な認識と興味関心を高める効果があるといった仮説を立てた。

検証の結果、アイヌ民族・文化に関する基礎的な認識と興味関心を高める効果は、ワークシート（学習記録）の内容からある程度認められた。とりわけ、興味関心の効果は、民族共生象徴空間（ウポポイ）へ足を運んでみたいといった声より窺える。よって、興味関心が高まったことにより、他の情報に触れてみたいという考えが生じたものと判断できる。

また、新聞活用の有用性は、キーワードの抽出、他者との情報交換、記事内容の重点の記述といった段階的な学習活動にあったと考えられる。

キーワード：アイヌ文化、新聞活用、民族共生象徴空間、看護師養成課程、基礎教養科目

## I. はじめに

2020年、JR北海道の特別急行列車へ乗ると、「イランカラッテ」という車内アナウンスを耳にすることがある。これは、アイヌ語で「こんにちは」を意味する。2020年7月12日、アイヌ文化復興拠点の民族共生象徴空間（ウポポイ）が、COVID-19拡大の影響を受け約2か月遅れで開設した。中核施設となる国立アイヌ民族博物館は、アイヌ民族・文化の情報発信拠点として期待が大きい。冒頭のアイヌ語による車内アナウンスは、ウポポイの開設に合わせ、それを後押しする1つの試みとなっている。

折しも、昨年（2019年）、アイヌ新法案が、閣議決定となり、条文に「先住民族」であることを明記した。また、アイヌ民族・文化を題材とした漫画「ゴールデンカムイ」の人气が興味関心を高めた。さらには、樺太アイヌの闘いを題材とした直木賞受賞作『熱源』（2019年）も興味関心に一役買った。こうした一連の動きにより、アイヌ民族・文化は、これまでになく注目される機会となっている。

他方、教育分野に目を向けると、社会系教科の検定済

教科書や資料集に、アイヌ民族・文化に関する内容を取り上げる機会は増えたものの、体系的な学習活動を展開できるようになっていない。その結果、アイヌ民族・文化学習は、初等・中等教育の段階において、断片的な学習活動に留まっている。具体的には、修学旅行において博物館資料を見学するような形が多い。とりわけ、教科学習との関係性には乏しく、効果的な学習効果になっていない。

大学等の高等教育機関では、歴史や文化といった専門教育を除くと、アイヌ民族・文化の内容に触れる機会すらない。細々ながら、基礎科目の文化人類学や教員養成課程の社会科教育において、多少取り上げる程度にすぎない。こうしたことから、北海道在住者でも、アイヌ民族・文化に対する知識は乏しい。

そこで、本稿では、看護師養成課程（高等教育機関）の「基礎科目」文化人類学の授業内容において、アイヌ民族・文化を取り上げ、新聞記事を活用しながら、その学習効果と有用性を明らかにしようとするものである。具体的には、アイヌ民族・文化の初学者の場合、新聞活用により、内容の基礎的な認識と興味関心を高める効果があるといった仮説を立て、それを検証する。新聞記事は、専門書とは異なり、記者の取材を通しての情報を平

易に伝えるものが多い。加え、日常生活の中で話題性が高い内容を取り扱っている点も見逃せない。結果、単なる記事内容の認識に留まらず、そこからの発展的学習へ探究させやすい。

ところで、大学等における新聞活用教育に関する先行研究・実践は、いくつか生産されている。教養・基礎科目の内容に限れば、原島・勝村（2016）や尾島（2020）がある。原島・勝村（2016）では、大学基礎教育において、「新聞活用」という授業科目を設定し、その効果を考察している。具体的には、「新聞活用」受講者に『語彙・読解力検定』（朝日新聞・ベネッセ主催）を受験させ、授業効果を検証した。その結果、2013年では、準2級を受験し、全国平均値であったものの、2014年では、全国平均値（59%）を上回る69%を記録した。さらに、上級クラスの受講生は、さらに上級（2級・準1級）を受験し、合格している。以上の実績から、「新聞活用」の授業の効果を強調している。その要因に、ある種の「強制的」な新聞活用の設定を挙げている。加え、大学等の連携における新聞活用教育の組織化、アクティブ・ラーニングに適する新聞活用教育の枠組みの構築を提言している。

筆者も、これまでいくつかの大学授業で単発的な新聞活用を行い、一定の効果がある点を確認してきた。他方、学生の自主的な活動として、継続的な新聞活用に広がっていない点を課題としている。その解決の一助とな

る「新聞活用」の科目設定には、魅力を感じた。

尾島（2020）は、新聞活用の有用性として、教科横断的な学びを成立させる教材の可能性に触れている。新聞の情報が、多様性を有することを考えると、効果の期待は大きい。学校教育では、「総合的な学習の時間（探究）」の教材としても、有益な効果を出すであろう。

いずれも、新聞活用は、大学基礎教育における文書理解の手段としての有用性を強調している。

他方、どのような学習内容の枠組みにおいて、新聞活用を位置付けているか、また、どの程度の内容理解や興味関心を得たか、といった検討はやや不十分である。とりわけ、興味関心の変容は、その後の行動に結び付いているかで判断できよう。そのような学習意欲を確認できれば、教養・基礎科目における新聞活用の意義をさらに強化できる。

さて、その検証を、看護師養成課程で取り上げる理由は、以下のとおりである。自明の事ではあるが、看護師養成課程は、看護師国家試験受験資格を得るために体系的な科目配置をしている。その中であって、基礎科目は、入学年度で受講することが多い。これら科目に対する興味関心は、総じて低い。学生によっては、なぜ看護師養成課程で履修する必要があるのか、疑問を持っていることすらある。

以上をふまえ、基礎科目である文化人類学では、学習内容・活動において面白さや意外性を伝えることに工夫

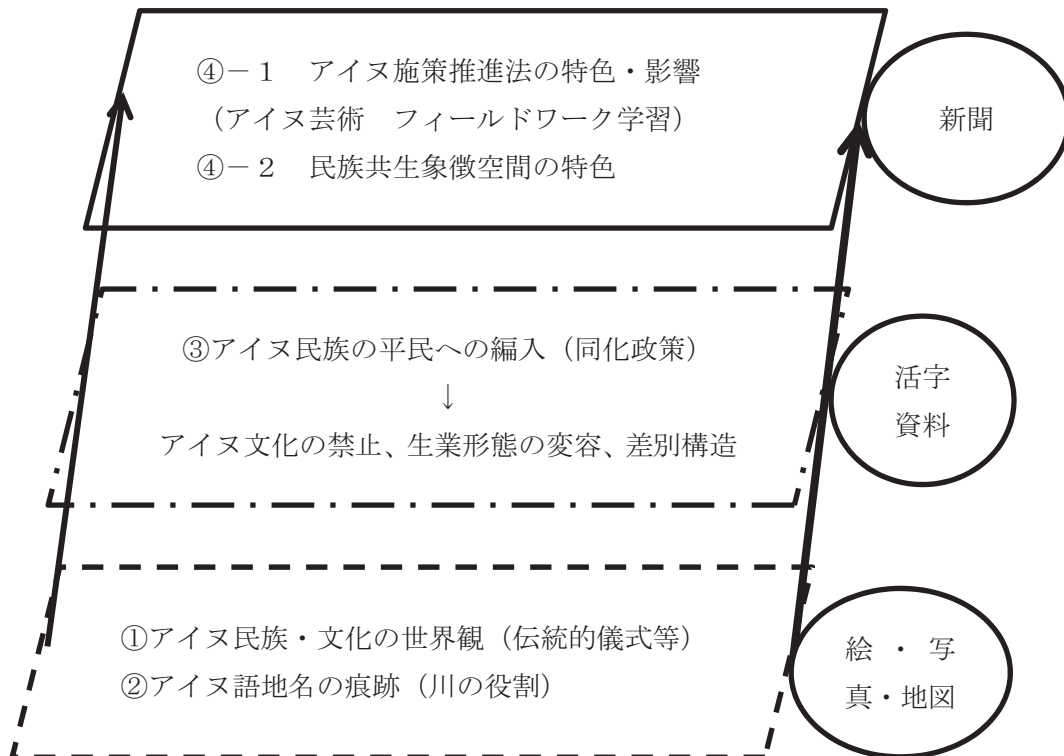
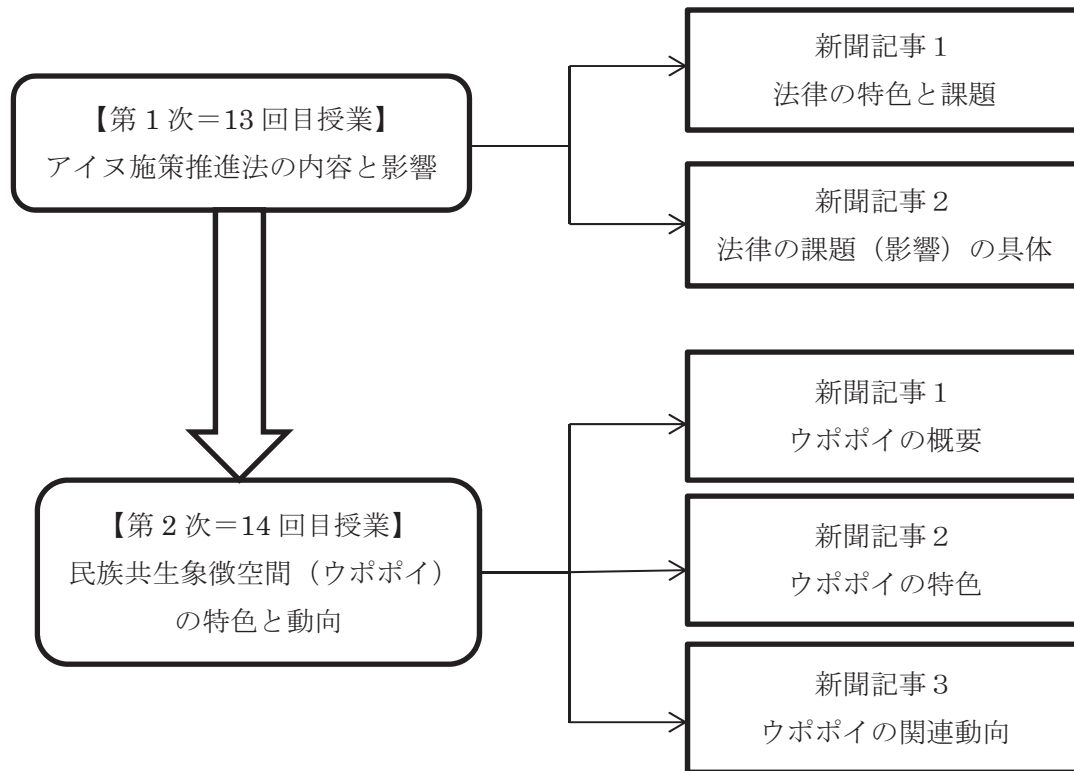


図1 アイヌ民族・文化の学習構造（5コマ分）

注）○数字は、授業の順番を意味する。矢印は、時間軸の方向性を指す。  
右の○の囲みは、授業時の主な使用教材を指す。



新聞記事情報（すべて北海道新聞記事）

第1次 新聞記事1 2019年2月15日付 新聞記事2 2020年1月13日付

第2次 新聞記事1 2019年12月20日付 新聞記事2 2020年1月1日付

新聞記事3 A・B 2019年12月27日付 2020年1月11日付

図2 アイヌ民族・文化における新聞活用授業の構造

を必要とする。その工夫の試みの1つとして、新聞活用に着目した。

教材として、新聞記事を取り上げる理由は、以下の点にある。情報媒体には、新聞の他に、インターネット、テレビ、文献・雑誌等がある。新聞には、紙面版と電子版がある。新聞の特色は、多様な情報の一覧性にある。内容は、社会、経済、国際、スポーツ等に分かれ、多様性がある。中心的な内容は、見出しの他に、リード文、図表、本文といった形で統合的な構造となっている。読者は、興味関心のなかった情報まで、目を向ける可能性がある。

インターネットの場合、瞬時的な情報収集に優れているものの、見出しのみの一覧性に限られる。

以上から、新聞は、情報の興味関心を広げる可能性が高い媒体と判断した。

## II. アイヌ文化学習の構造

本章では、アイヌ文化学習の実践概要（2019年度）について述べる。文化人類学の授業全体のうち、アイヌ民族・文化に関する学習は3分の1程度占める（図1）。その内訳は、①アイヌ民族・文化の世界観、②アイヌ語

地名、③同化政策、④アイヌ新法・民族共生象徴空間（ウポポイ）である。とりわけ、④のアイヌ新法と民族共生象徴空間の内容において、新聞記事を用いた授業を実践した（図2）。また、④の授業では、学外として、アイヌ芸術作品（ミナバ）に関するフィールドワーク学習も間接的に入れている。

次に、それぞれの授業内容の重点を示しておきたい。

世界観では、伝統的儀式や祭具を取り上げ、イオマンテ（熊送り）、イナウやイクスパイの役割について視覚的資料を用いながら思考認識させた。

アイヌ語地名では、道内の「別」や「内」と付く地名に着目し、これらの漢字を含むものを地図上で探せた。続いて、「別」と「内」は川を意味する地名であること。道内のアイヌ語地名のうち、約3分の1を占めることに触れた。また、アイヌ民族は、魚を捕る場所、山や海への移動手段として川を重要としていた点を強調した。

同化政策では、北海道旧土人保護法（現在は廃止）の施行以来、生業形態の変容、アイヌ文化（アイヌ語や伝統的儀式）の禁止などを強いて和人と区別し、優劣を作りだした点を取り上げた。その結果、和人による差別を生み出し、現在も解消されていない点に触れた。

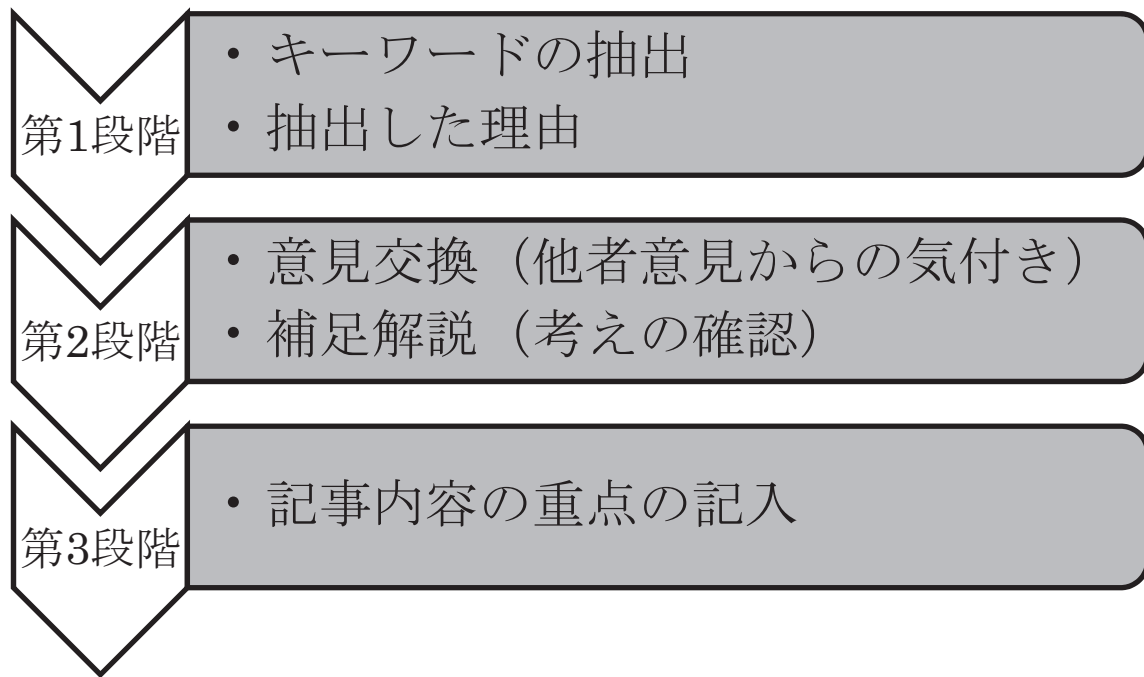


図3 新聞活用の展開（90分授業）

注）キーワードの抽出は、3つ又は1つ。なお、記事内容の重点は、第1次の場合、時間の関係上、宿題とした。

これらをふまえ、アイヌ新法（2019年改正）の特色や民族共生象徴空間の特色へつなげた。

以上の学習内容・展開は、不十分ながらもアイヌ民族・文化の特色、差別構造を生んだ政策、その影響と現状といった時間軸を活かし、断片的に理解させるよう努めたものである。

### Ⅲ. 授業実践の内容

#### 1. 受講生の概要

看護師養成課程の学生は、約40名であり、その大半を女性が占める。その内、一定の割合で、社会人経験者があり、職歴も多様性がある。大半は、道内出身者である。そのため、一部の学生は、高校卒業までに、アイヌ文化学習を経験している。

看護師養成課程の初学年は、座学中心であり、その大半を看護学関連の授業で占める。よって、文化人類学のような基礎科目は、1日の授業の中で、1科目程度に過ぎない。

#### 2. 授業実践の概要

本節では、授業実践の概要について述べる。新聞活用は、第1次、第2次といった2回の授業で行った。

活用の目的として、これまでのアイヌ民族・文化に関する授業内容をふまえ、新聞記事を活用して①アイヌ施策推進法の特色と課題、②民族共生象徴空間（ウポポ

イ）の特色・期待について理解を深めることを示した。同時に、新聞活用しての教育の有用性（事実認識／自分の考えの表明）を体感することに触れた。

新聞活用の展開は、第1段階として、重点と思うキーワードを抽出（3つまたは1つ）し、その理由を書くよう指示した（5分～15分間）。第2段階として、その情報をもとに、周辺の学生と意見交換（5分～10分間）を行い、補足解説（5分間）を加えた。第3段階として、記事内容の重点を書くよう指示した（5分間）。最後に、新聞活用教育について気付いたことや効果を書くよう求めた（図3）。

学習展開のねらいは、キーワードの抽出やその理由、他者意見、補足解説といった学習活動を行い、段階的に記事内容の重点に迫るといった点にある。まず、キーワードの抽出は、重点を築く骨格に値する。続く、他者意見や補足解説は、その骨格を強固にする役割をもつ。例えば、同じキーワードを抽出しても、その理由は、違うかもしれない。他者意見には、新たな考えに気付かせたり、自分の考えに確信を持ったり、といった効果を期待できる。加え補足解説は、自分の考え、他者意見に対する評価の確認場面となる。

第1次では、法律の特色と課題、その影響といった視点で区分し、それぞれ関連する記事内容を読み、思考させた。第2次では、民族共生象徴空間の概要、民族博物館、体験交流ホール、修学旅行、道民認知度といった視点で区分し、同じように行った（図4-1・2）。

第13回（ 月 日） 文化人類学

アイヌ施策推進法・民族共生象徴空間（ウポポイ）／新聞活用教育（NIE）

番号 氏名

【第1次】

新聞記事1（キーワードは各3つを選択）

法律の特色（キーワード） ・ ・ ・	キーワードを選んだ理由 ・ ・ ・
法律の課題（キーワード） ・ ・ ・	・ ・ ・
情報交換・補足説明用メモ 空間 略	
記事内容の重点 空間 略	

新聞記事2（キーワードは3つ選択）は略

■本時の新聞活用教育で気付いた・思ったことを書いてみよう（任意）

図4-1 第1次活用したワークシートの内容（一部省略）

注）実際はA4サイズ両面。

第14回（ 月 日） 文化人類学

アイヌ施策推進法・民族共生象徴空間（ウポポイ）／新聞活用教育（NIE）

番号 氏名

【第2次】

新聞記事1（キーワードは各3つを選択）は略（第1次新聞記事1の欄と同じ）

■アイヌ施策推進法・民族共生象徴空間の認識を深めるため、新聞記事を用いました。

今回（13・14回）の授業を振り返り、どのような点に新聞記事を活用する教育効果があったと思いますか

新聞記事2（キーワードは各1つ選択）は略（第2次新聞記事3の欄と同じ）

新聞記事3A・B（キーワードは各1つ選択）

修学旅行（キーワード） ・	キーワードを選んだ理由 ・
道民認知度（キーワード） ・	・
情報交換・補足説明用メモ 空間 略	
記事内容の重点 空間 略	

図4-2 第2次活用したワークシートの内容（一部省略）

注）実際はA4サイズ両面。



表1 第1次の授業実践で活用した一部新聞記事の概要

見出し：アイヌ新法案 閣議決定 「先住民族」初めて明記 脇見出し：官房長官「未来志向」強調 格差や差別 国の責任触れず
【リード文】 政府は15日、アイヌ民族の誇りを尊重し共生社会を目指すことを目的とした、アイヌ民族に関する新法案を閣議決定した。法律として初めてアイヌ民族を「先住民族」と位置付け、アイヌ民族に関する差別や権利侵害を禁ずる基本理念を明記している。法案は国会に提出し審議を経て、年度内の成立を目指している。

資料) 2019年2月15日 北海道新聞夕刊1頁。

表2 「法律の特色」で表出したキーワード

表出したキーワード	人数(人)	表出したキーワード	人数(人)
先住民族	21	権利侵害	4
アイヌ民族	13	未来志向	4
アイヌ新法案	12	観光振興(産業振興)	4
アイヌ文化	9	共生社会	4
差別	8	特別措置	3
民族政策	6	尊重	3
		水産・森林資源権	3

資料) ワークシートより。

注) キーワードを3つ抽出。類似の内容を含む場合がある。表出したキーワードは22。

女子学生1(記事内容の重点) キーワード: 先住民族, アイヌ文化, アイヌ民族

政府は、法律として初めてアイヌ民族を「先住民族」と位置付け、アイヌ民族の誇りを守り差別、権利侵害を禁ずる基本理念を明記した新法案を閣議決定した。この法は、従来の福祉政策が軸だったアイヌ政策とアイヌ文化振興法の内容が盛り込まれたものとなっている。しかし、新法が必要とされる背景が明らかになっていないことから、アイヌ民族にだけ利権が与えられているという新たな偏見が生まれる可能性があり、今後の課題となっている。

資料) ワークシートより。

女子学生2(記事内容の重点) キーワード: アイヌ新法案, 先住民族

従来のアイヌ政策は、一般社会の中での格差是正を目的とした福祉政策が中心であった。新法案は、アイヌ民族を先住民族と初めて明記し、林産物の採取やサケの捕獲など、先住民族の水産・森林資源権に関わる特別措置に触れた。

資料) ワークシートより。

## IV. 授業実践の成果・効果

本章では、授業実践の成果について浮き彫りとし、どのような効果を得たのか明らかにする。

### 1. 第1次の授業実践の成果

第1次の授業実践では、「法律の特色」に関するキーワードの表出結果を取り上げる。

表出したキーワードは、22種類におよんだ。表出頻度の高いキーワードは、「先住民族」21名であった。続いて、「アイヌ民族」13名、「アイヌ新法案」12名であった。他に、アイヌ文化、差別、民族政策、権利侵害、未来志向、観光振興、共生社会、特別措置、尊重、水産・森林資源権が挙がった(表1・2)。

上位にあった先住民族、アイヌ新法案は、見出しの中にある文言であり、アイヌ民族は、リード文に含まれるものであった。

受講者は、見出しやリード文の中に重要性が高いキーワードが含まれていることを概ね予測できたものと判断できる。

次に、記事内容の重点と表出したキーワードの関係性をみたい。以下には、記事内容の重点としてまとめたものを2つ例示した。

女子学生1では、キーワードとして、先住民族、アイヌ文化、アイヌ民族を選んだ。この3つのキーワードは、記事内容の重点のまとめに含まれている。

女子学生2では、キーワードとして、アイヌ新法案、先住民族を選んだ。この2つのキーワードも、記事内容の重点のまとめに含まれている。

表3 第2次の授業実践で活用した一部新聞記事の概要

見出し：修学旅行221校予約 脇見出し：道内2万8千人 滑り出し好調
【リード文】白老 胆振管内白老町で来年4月に開業するアイヌ文化復興拠点「民族共生象徴空間（ウポポイ）」への修学旅行の受け付けが16日に始まり、26日時点で道内外221校、児童生徒数約2万8千人に達した。政府は年間来場者100万人を目標とし、修学旅行生の集客に期待する。運営主体のアイヌ民族文化財団（札幌）は達成に向けて好調な滑り出しとみている。

資料）2019年12月27日 北海道新聞朝刊26頁。

表4 「修学旅行」で表出したキーワード

表出したキーワード	人数（人）
221校予約	14
ウポポイ	6
修学旅行生の集客	5
滑り出し好調	5
年間来場者100万人を目標	3
道外	2

資料）ワークシートより。

注）キーワードを1つ抽出。類似の内容を含む場合がある。表出したキーワードは10。

以上から、抽出したキーワードを参考としながら、記事内容の重点をまとめたものと判断できる。よって、キーワードの抽出は、記事内容の重点をまとめる方向性を決めたものと考えられる。

## 2. 第2次の授業実践の成果

第2次の授業実践では、「修学旅行」に関するキー

ワードの表出結果を取り上げる。表出したキーワードは、10を数えた。表出頻度の高いキーワードは、「221校予約」16名であった。続いて、「ウポポイ」6名、「修学旅行生の集客」、「滑り出し好調」5名であった。他に、年間来場者100万人を目標、道外、アイヌ文化、国立アイヌ民族博物館、期待、学校が挙がった（表3・4）。

上位にあった221校予約、滑り出し好調は、見出しの中にある文言であり、ウポポイ、修学旅行生の集客は、リード文に含まれるものであった。

こちらも同じく、見出しやリード文の中に重要性が高いキーワードが含まれていることを予測できたものと判断できる。

以上から、第1・2次の授業実践を通じて、記事内容の重点をまとめるにあたり、抽出したキーワードが方向性を決める役割を果たしたものと考えられる。

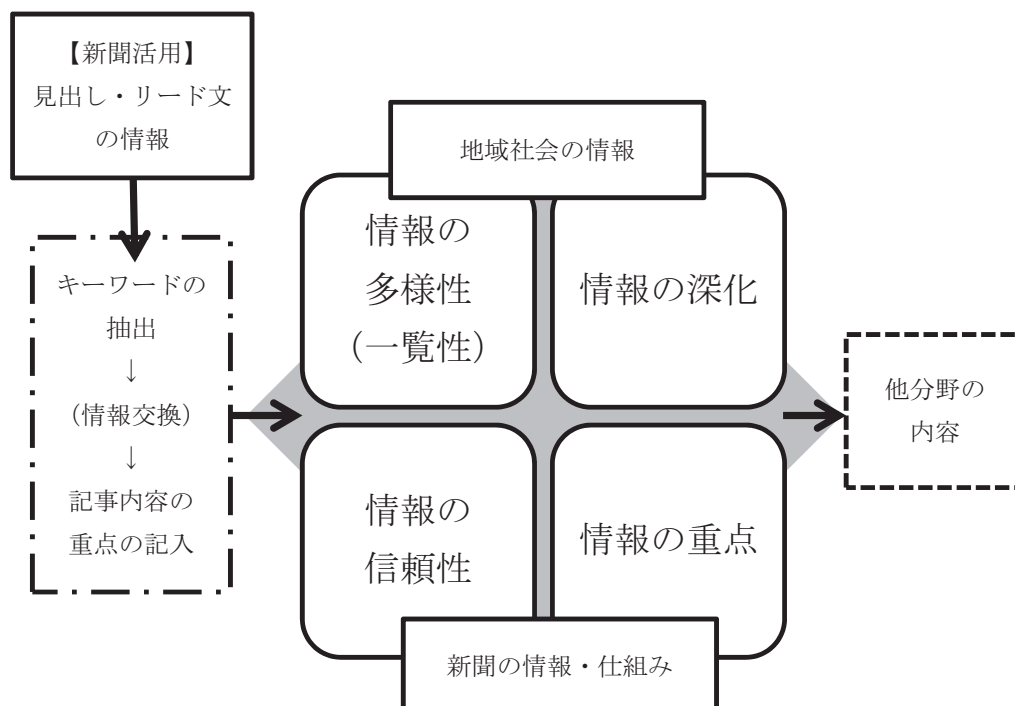


図5 新聞活用による教育効果（構造図）



### 3. 新聞活用の教育効果

本節では、今回の新聞活用を通じて、どのような教育効果を生んだのか明らかとする。

教育効果は、地域、社会情報の多様性と深化、新聞のもつ有用性である（図5）。

地域、社会情報の多様性は、「どのようなことが社会で生じているか、わかる」や「地域の様子について知る事ができる」といった意見から窺える。身近な地域でも、簡単に情報収集できるとは限らない。新聞は、重要な地域、社会情報を知る機会となっている。情報の深化は、「深い理解ができるし、日本語力も向上する」、「物事の前後の知識が手に入れることができる。そのため、連続的な情報を手に入れることができる」、「プラスアルファの知識を読み取ることができた」といった意見から窺える。すでに断面的・抽象的な知識はあるものの、詳細にわからないこともある。そのような場合、新聞の果たす役割があることを指摘している。

新聞の有用性は、「文字の大きさやフォントが工夫されているので、大事なところがわかりやすい」、「一番伝えたいことは何か、ということを見つかる力がつく」、「出典が明確なので、新聞の方が信頼度は高い」といった意見から窺える。情報の重点を判断したい場合、新聞は有用性があることを指摘している。文書資料では、瞬時に情報の重点を判断することが難しい。新聞の場合、文字の大きさ（見出し）によって、瞬時に情報の重点を押えることができる。

加え、「見出しとリード文にキーワードが入っている可能性が高い。また、繰り返し出てくる言葉も重要である。文の最初と最後の部分に大事な内容がある。このような仕組みは、看護関連の本でも同じである」といった新聞のもつ仕組みが、他分野の情報理解に役立つという考えも出された。

以上から、新聞活用を通じて、アイヌ民族・文化に関する基礎的な認識と興味関心を高める一定の効果を確認することができた。

## V. おわりに

本稿は、看護師養成課程（高等教育機関）の「基礎科目」文化人類学の授業内容において、アイヌ民族・文化を取り上げ、新聞記事を活用しながら、その学習効果と有用性を明らかにしようとするものであった。アイヌ民族・文化の初学者の場合、新聞活用により、内容の基礎的な認識と興味関心を高める効果があるといった仮説の検証を行った。

その手順として、アイヌ文化学習の構造において新聞

活用を位置付け、その授業実践の手法・流れを述べた。それをふまえ、第1・2次の授業実践の成果を断片的に示し、仮説の検証をした。

その結果、すでに述べたように、アイヌ民族・文化に関する基礎的な認識と興味関心を高める効果は、ワークシート（学習記録）の内容からある程度認められた。むしろ、この結果は、新聞活用以前の学習活動によるところもあろう。基本となるアイヌ民族・文化に関する内容を時間軸の視点で取り上げ、学外活動の調べ学習や芸術作品に触れる機会を与えた。

とりわけ、興味関心の効果は、民族共生象徴空間（ウポポイ）へ足を運んでみたいといった声より窺える。興味関心が高まったことにより、他の情報に触れてみたいという考えが生じたものと判断できる。

新聞活用の有用性は、段階的な学習活動の開発にあったと考えられる。具体的には、キーワードの抽出、他者との情報交換、記事内容の重点の記述といった流れである。新聞活用は、すべてにおいて有用性を生むのではなく、どのように学習活動へ組み入れていくか、にある。

よって、興味関心を高める新聞記事の発掘・収集はもちろん同時に活用方法・場面の開発も重ねていかなければならない。

課題は、いくつかの新聞を活用させる時間の配分である。新聞記事の読解、思考判断には、どうしても個人差が大きくなりやすい。今回、一部の受講生は、ワークシートをすべて埋めることができなかった。新聞記事の情報量と段階的に作業する時間が不十分であった。このような学生は、ただ作業に追われながら中途半端に終わり、新聞活用の効果を十分実感できなかったに違いない。

以上から、新聞記事を含む文書（活字）資料の活用は、基礎・教養科目のような場面でも段階的に学習活動を構築していく必要がある。この点については、思考錯誤しながら学習活動の開発を継続していきたい。

## VI. 文 献

- 尾島 卓（2020）：新聞の教材活用に関する実践的検討，岡山大学教育学部開設講義「教育における新聞活用の理論と実際」の総括を中心に，岡山大学教師教育開発センター紀要第10号別冊，pp. 245-258.
- 菊地達夫（2020）：アイヌ文化のフィールドワーク学習と効果－看護師養成課程「文化人類学」の授業課題として－，野外文化教育第18号，pp. 91-99.
- 原島正衛・勝村務（2016）：新聞活用授業の展開，北星論集（経）第55巻第2号，pp. 137-141.